

複合専門用語の語形成パターン記述における
概念の階層レベルの役割について

影浦 峽

**On the Role of Levels in Concept Hierarchies
in the Descriptions of
Formation Patterns of Complex Terms**

KAGEURA Kyo

Abstract

In this paper the author examines a possible contribution of the explicit introduction of 'levels' in concept hierarchies in the description of formations of complex terms. First, some semantic or conceptual analyses of complex words are reviewed, showing that the semantic or conceptual categories used in these studies implicitly presuppose certain levels in semantic or concept hierarchies but they do not need to introduce 'levels'. The importance of levels in concept hierarchies in the description of term formations are then considered, proposing a different description viewpoint of term formation which is valid for terms but not necessarily ordinary words. Finally how term formation patterns are described is roughly sketched.

1 はじめに

専門諸分野の急速な発展に伴い、多くの専門用語が新たに作られている。そして、専門用語の非常に多くは複合語である。例えば、野村と石井(1989)の調査では、対象となった約65000の異なり専門用語のうち85パーセントが複合語である。従って、複合専門用語の語形成パターンの規則性を記述できるならば、それは語形成の理論に貢献するのみでなく、シソーラスの構築や用語収集、複合語解析など様々な応用に役立つであろう。

発表者は、特に情報学的応用を念頭にして、複合専門用語の語形成パターンの分析を行ってきたが、それを通して、専門用語の語形成パターンを記述するためには、概念階層の明確化と用語や語基が表わす概念の階層中での位置づけの明確化が必要となるような視点が重要であることを認めるに至った。本発表では、これまでの語構成研究における概念階層のレベルの扱いを簡単に検討し、次いで、専門用語における階層レベル考慮の意味を考察する。最後に、ドキュメンテーション分野の用語を例に、階層を考慮した語形成パターン記述の具体的方針を検討する。

2 これまでの語構成研究

複合語の構成を意味的あるいは概念的なレベルで分析する場合、語基の意味または概念、複合語における語基間の関係、複合語全体が表わす意味または概念という三つの道具だて

を用いてその相互関連を明らかにすることが主目的となる¹。意味や概念のカテゴリーとしては、例えば次のようなものがある。

Pugh (1984) — 物理的実体、表象的実体、ソフトウェア実体、中立的実体、動作、性質、量、関係、その他。

石井 (1986) — 自然物、動植物、物品、食品、道具、薬品、力、人間、機械、衣料、部分、家具、資材、地類、容器、建物、空間、形状、数量、動き、状態、時間。

小山 (1991) — 物質、人体部位、マクロ的ミクロ的形狀/形状変化、人体各部の機能、疾患・所見・病的状態、強度変化、比喩、付属的要素、その他。

これらの例における意味または概念のカテゴリーは、それぞれ数も詳細度も異なり、個々のカテゴリーが一致することもあまりないが、次のような共通点がある。第一に、基本的にカテゴリーは相互に排他的であることであり²、第二に、各研究におけるカテゴリーの集合の中で、各カテゴリーの特定度は、一つないし複数のレベルにまとめることができるという点である。

このような性格を持つカテゴリーの集合は、単純な概念の階層を想定してそのうちのいくつかのレベルで認められるカテゴリーを取ってきたものととらえることも可能である。このように、概念の階層を背景にしてこれらの意味または概念カテゴリーを考えるならば、これまでの語構成研究におけるカテゴリーの設定においては、明示的ではないにせよ、概念のレベルという考えが含まれていたと見ることができる。けれども、階層におけるレベルの問題を多くの語構成研究で明示的に取り上げないのは、それぞれの研究の目的から見ても必要がなかったからである。

3 概念階層のレベルと専門用語の語形成

複合専門用語の語形成パターン記述において、なぜ、概念の階層レベルを明示的に考慮することが必要かを明らかにするためには、相互に関連する二つの点に注意する必要がある。第一は、発表者が静的な語構造の分析や複合語の解析と解釈ではなく、語の形成を扱っていることであり、第二は、一般語ではなくて専門用語を対象としていることである。

第一の点についてであるが、複合語の構造の静的な記述や解析などを目的とする場合には、複合語の表現性、すなわち各語の意味とその構成要素の意味との関連を扱うことが多い。従って、分析の対象となる語彙データ中の一つ一つの複合語の構成を記述するため、また、構成パターンを整理するために適切な概念カテゴリーを設定すればよいことになる。つまり、個々の語基あるいは語に認められる意味的あるいは概念的な特徴が重要なのであって、その概念体系中での位置づけが重要なわけではない。例えば、階層を想定した場合に一つ上位にくるカテゴリー A でなく、下位レベルの B と C を用いるとするならば、それは、B と C というタイプを区別すること自体が重要だからであり、B と C とが属するレベルが重要なわけではない。

一方、語形成を考えたとしても、一定の形成パターンにおける語基の相対的結合可能性のみを考えるならば、複合語の静的な記述や解析などを目的とした場合と同じで、概念階

¹ただし、語基間の意味的結合関係を整理するだけで大仕事であり、それのみを扱う場合も多い。

²例示では説明を省いたので、解釈によっては重なりを認めることができる場合もある。

層のレベルを考慮する必要はない。一般語における複合語形成を問題とする場合には、様々な要因が複合語形成を規定し、語基のある結合形が語として認められるかどうかという基準は曖昧であるため、ある結合パターンにおける語基の相対的な結合可能性以上に語形成パターンを追及することは難しい。それに対して、専門用語は、領域の概念体系に応じて言語記号上も体系的に作られることが多いし、さらに、ある領域で一般に受け入れられて初めて用語となる。従って、専門用語に関しては、ある領域の概念体系中で規定される概念の場それぞれにおいて、語基間の結合可能性に留まらない語形成傾向をとらえることができる。すなわち、現在そして現在以降のそれぞれの共時的断面において実際にその領域の専門用語として受け入れられうる語形成のパターンにはどのようなものがあるかという点である。現時点での問題としては、ある領域の専門用語として生産的な部分はどこで、どのようなパターンかということの記述となる。これは、語形成の一般的パターンを専門用語を例に考えるというのではなく、専門用語の語形成パターンを考える場合に、必要な記述のあり方の一つである。

複合語の語形成に関するこのような記述の視点を現実的存在可能性と呼ぶと、現実的存在可能性の観点からは、一つ一つの用語の表現性のみでなく、その領域の概念体系における用語の位置づけ、用語同士の上下あるいは横の張り合いも考慮しなくてはならないことになる。この場合、主題領域の概念体系を、全体として明示的に考えなくてはならず、そのときに、用語や語基の概念カテゴリーを、階層性をもった概念体系のあるレベルに位置づけたかたちでとらえることが有用となる。

4 具体的な記述方針

単純な例から始めよう。例えば、ドキュメンテーションを表わす用語で、人を表わす複合語形成パターンの一つに、一般的な人概念を組織概念で限定するものがある。「図書館員」や「資料館員」、「専門図書館員」、「公共図書館員」などである。このとき、この語形成パターンにおける語基の相対的結合パターンを考えるならば、これらの複合語の語形成結合における限定部はドキュメンテーション関連機関であると言うだけでよい。特に、ドキュメンテーション関連機関の概念がすべて所属組織を限定する語形成パターンで潜在的に限定部となりうるならば、ドキュメンテーション関連機関というカテゴリーは記述の一般性の観点からは非常に望ましいものである。けれども、現実的存在可能性の観点からは、ドキュメンテーション関連機関というカテゴリーにおける概念の階層を定義し、そのうちでどのレベルとどのレベルが、所属機関による限定という語形成パターンの限定部に参加しているかを明示的に述べる必要がある。「図書館」や「資料館」というレベルに加えて、「専門図書館」や「公共図書館」という、図書館の下位概念に相当するドキュメンテーション関連機関も限定部として用いられるという事実が重要だからである。

概念の階層を考えるにあたっては、まず、一般的な概念と主題領域における専門概念とを区別する必要がある。もちろん、「人」という一般概念は「図書館員」という専門概念の上位概念であるという見方は成り立つから、一般的な概念の体系と専門概念の体系とはつながりのないものではなく、むしろ、包括的な概念体系の部分集合として専門概念の体系は定義されると考えてよい。さらに、概念の階層レベルを定義する必要がある。

専門用語は専門概念を表わすから、専門用語が作られる場合は、専門概念の体系において

一定の場所に位置づけられる。従って、語形成の場は、概念のタイプとレベルとで規定される。一方、語形成に用いられる語基は、専門概念を表わし、専門概念の体系のある場所に位置づけられるようなものと、より一般的な概念とがあるから、専門用語の形成は、理論的には、(1) 一般概念を表わす語基の組み合わせで専門概念を作る場合、(2) 専門概念を主要部とし、それを一般概念で特定化して専門概念を作る場合、(3) 一般概念を主要部としてそれを専門概念で特定化して専門概念を作る場合、(4) 専門概念を主要部とし、それを専門概念で特定化して専門概念を作る場合、に分類されることになる。語基が専門概念を表わすようなパターンでは、語形成に参加する概念も専門領域の概念体系内で定義されるから、理論的には、現実的存在可能性の視点から語形成パターンを規定できるが、語基が一般概念を表わす場合、それに対しては現実的存在可能性を規定できない。この点を突き詰めていくと、現実的存在可能性の規定の出発点として必要な専門領域の基本概念の定義の問題にたどりつくが、それについてはここでは述べない。

5 おわりに

特に専門用語の語形成の研究において、概念階層を考え、用語と語基が表わす概念が位置づけられている階層中のレベルを考慮することの重要性、あるいはそれらが重要性を持つような語形成記述のありかたを検討してきた。今回提示した方針に基づく語形成パターンの記述は、まだ限られたデータに対してしか行っていないが、情報学的応用への有用性を考えるならば、一つの分野の主要な用語の集合全体に対して概念階層のレベルを考慮した記述を進めなくてはならない。

現在、より大きな用語データを対象に分析を進めている途中であるが、現実的存在可能性を認める以前に存在すると考えられる、語基同士の相対的な選択制限と現実的存在可能性における語基の結合傾向との理論的および実際の相違、概念の置換による語形成と特定化による語形成の相違、全体として一貫性を保ったかたちでの概念階層の定義のしかた、概念階層と語形成パターンから認められる領域の基本語基との関係、必ずしも概念体系に依じて体系的に構成されたわけではない複合語への対処、語形成単位としての語基の定義のしかたなど、検討しなくてはならない問題は多い。

参考文献

- 石井正彦 (1986) 「複合名詞の語構造分析についての一考察 — 学術用語を例に —」『国語学』第 144 集. p. 13-26.
- 小山照夫 (1991) 「医学専門用語の構造解析」(私的配付資料).
- 野村雅昭, 石井正彦 (1989) 「学術用語語基表」国立国語研究所. 766p.
- Pugh, J. M. (1984) *A Contrastive Conceptual Analysis and Classification of Complex Noun Terms*. PhD Thesis, University of Manchester. 344p.